

上謝野晶子訳

源氏物語(才)

與謝野晶子譯

源氏物語

第一卷



世界文學選書

三笠書房

世界文學叢書 4

源氏物語

第一卷

¥ 200

昭和二十四年六月十五日
昭和二十四年九月廿五日
昭和二十四年十月一日
印刷發行
初版發行

譯者 與謝野晶子

發行者 廣瀨文子

東京都千代田區神田神保町二

印刷者 內海精一

東京都文京區戸崎町十四

發行所

株式會社 三笠書房

東京都千代田區神田神保町二ノ二〇

電話九段四六五〇四番

振替東京二二〇九六番

三和印刷株式會社 印刷・共成社 製本

第一卷 目次

花 ^{はな}	櫛 ^{かみ}	葵 ^{あひひ}	花 ^{はな}	紅 ^{くさ}	末 ^{すえ}	若 ^わ	夕 ^{ゆふ}	空 ^う	帚 ^{はき}	桐 ^{きり}
散 ^{ちり}			葉 ^{ちの}	摘 ^と						
里 ^{さと}			宴 ^{えん}	賀 ^が	花 ^{はな}	紫 ^{むらさき}	顔 ^{がほ}	蟬 ^{せみ}	木 ^ぎ	壺 ^{つぼ}
.....										
三三	一九	二六	二五	一四〇	一九	八五	五四	四	一八	一

須 ^す	磨 ^あ	三
明 ^あ	石 ^し	二五
澤 ^あ	標 ^つ	二七五
蓬	生 ^ふ	二九五
解説(源氏物語と晶子源氏)	池田龜鑑	三〇九
與謝野晶子女史の筆蹟	卷頭	

源氏物語 第一卷

桐

壺

紫のかどやく
ことわりも
先思ひあはざる
(晶子)

どの天皇様の御代であつたか、女御とか更衣とかいはれる後宮が大勢ゐた中、
を得てゐる人があつた。最初から自分こそはいふ自信と、親兄弟の勢力に
敬な女として嫉まれた。その人と同等、若しくはそれより地位の低い更衣達は
た。夜の御殿の宿直所から退る朝、續いてその人ばかりが召される夜、目に見
つたか身體が弱くなつて、心細くなつた更衣は多く實家へ下つてゐがちと云ふことになると、いよいよ帝はこの人にば
り心をお引かれになるといふ御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮などといふものがお出来にならない。御
聖徳を傳へる歴史の上にも暗い影の一所残るやうなことにのみなりかねない状態になつた。高官達も殿上役人達も困つて、
御覺醒になるのを期しながら、當分は見ぬ顔をしてゐたいといふ態度をとる程の御寵愛ぶりであつた。唐の國でもこの種
類の寵姫、楊家の女の出現によつて亂が醸されたなどと蔭ではいはれる。今やこの女性が一天下の傾ひだとされるに至つ
た。馬嵬の驛がいつ再現されるかも知れぬ。その人にとつては堪へ難いやうな苦しい雲間氣の中でも、ただ深い御愛情だ
けを頼りにして暮してゐた。父の大納言はもう故人であつた。母の未亡人が生れのよい見識のある女で、我が娘を現代に
勢力のある派手な家の娘達にひけを取らせないよき保護者たり得た。それでも大官の後援者を持たぬ更衣は、何かの場合
にいつも心細い思ひをするやうだつた。

前生の縁が深かつたか、またもないやうな美しい皇子までがこの人からお生れになつた。寵姫を母とした御子を早く御
覽になりたい思召から、正規の日数が立つと直ぐに更衣母子を宮中へお招きになつた。小皇子はいかなる美なるものより
も美しい顔をしておいでになつた。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生れになつて、重い外戚が背景になつてゐた。

疑ひもない未來の皇太子として世の人は尊敬を捧げてゐるが、第二の皇子の美貌にならぶことが出来にならぬため、それは皇家の長子として大事に遊ばされ、これは御自身の愛子として非常に大事がつておいでになつた。更衣ははじめから普通の朝廷の女官として奉仕する程の軽い身分ではなかつた、ただお愛しになる餘りに、その人自身は最高の貴女と云つてよい程の立派な女ではあつたが、始終お傍へお置きにならうとして、殿上で音楽その他のお催し事を遊ばす際には、誰よりもまづ先きにこの人を常の御殿へお呼びになり、また或る時はお引留めになつて更衣が夜の御殿から朝の退出が出来ずそのまま晝も侍してゐるやうな事になつたりして、やや軽い風にも見られたのが、皇子のお生れになつて後目に立つて重なりしくお扱ひになつたから、東宮にもどうかすればこの皇子をお立てになるかも知れぬと、第一の皇子の御生母の女御は疑ひを持つてゐた。この人は帝の最もお若い時に入内した最初の女御であつた。この女御がする批難と恨み言だけは無關心にしておいでになれなかつた。この女御へ濟まないと云ふ氣も十分に持つておいでになつた。帝の深い愛を信じながらも、悪く云ふ者と、何かの缺點を搜し出さうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としてゐる心細い更衣は、愛されれば愛される程苦しみがふえる風であつた。

住んでゐる御殿は御所の中の東北の隅のやうな桐壺であつた。幾つかの女御や更衣達の御殿の廊を通ひ路にして帝がしばしばそこへおいでになり、宿直をする更衣が上り下りして行く桐壺であつたから、始終眺めてゐねばならぬ御殿の住人達の恨みが量んで行くのも道理と云はねばならない。召されることが餘り續く頃は、打橋とか通ひ廊下のある戸口とかに意地の悪い仕掛けがされて、送り迎へをする女房達の着物の裾が一度で痛んでしまふやうなことがあつたりする。また或る時はどうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がさされてあつたり、そこが通れねばこちらを行く筈の御殿の人同志が云ひ合せて、桐壺の更衣の通り路をなくして辱しめるやうなことなどもしばしばあつた。數へ切れぬ程の苦しみを受けて、更衣が心を滅入らせてゐるのを御覽になると帝は一層憐れを多くお加へになつて、清涼殿に續いた後涼殿に住んでゐるた更衣を外へお移しになつて桐壺の更衣へ休息室としてお與へになつた。移された人の恨みはどの後宮よりもまた深くなつた。

第二の皇子が三歳におなりになつた時に袴着の式が行はれた。前にあつた第一の皇子のその式に劣らぬやうな派手な準備の費用が宮廷から支出された。それにつけても世間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌と聰明さと

が類の無いものであつたから、誰も皇子を悪く思ふことは出来なかつた。有識者はこの天才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に生れてくるものかと皆驚いてゐた。その年の夏のことである。御息所——皇子女の生母になつた更衣はかう呼ばれるのである——は一寸した病氣になつて、實家へさがらうとしたが帝はお許しにならなかつた。どこか身體が悪いと云ふことはこの人の常のことになつてゐたから、帝はそれほど驚きにならずに、

「もう暫く御所で養生をして見てからにするがよい。」

と云つておいでになるうちに次第に悪くなつて、さうなつてからはんの五六日のうちに病は重症になつた。母の未亡人は泣く泣くお暇を願つて歸宅させることにした。こんな場合にはまたどんな呪詛が行はれるかも知れない、皇子にまで禍ひを及ぼしてはとの心使ひから、皇子だけを宮中に留めて、目立たぬやうに御息所だけが退出するのであつた。この上留めることは不可能であると帝は思召して、更衣が出かけて行く所を見送ることの出来ぬ御尊貴の御身の物足りなさを堪へがたく悲しんでおいでになつた。

華やかな顔だちの美人が非常に瘦せてしまつて、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあつたが口へは何も出して云ふことの出来ないのがこの人の性質である。有るか無いかに弱つてゐるのを御覽になると帝は過去も未來も眞暗になつた氣が遊ばすのであつた。泣く泣くいろいろな頼もしい將來の約束を遊ばされても更衣はお返辭も出来ないのである。目つきも餘程だるさうで、平生からなよなよとした人が一層弱弱しい風になつて寝てゐるのであつたから、これはどうなることであらうと云ふ不安が大御心を襲ふた。更衣が宮中から輦車で出てよい御許可の宣旨を役人へお下しになつたり遊ばされても、また病室へお歸りになると今行くと云ふことをお許しにならない。

「死の旅にも同時に出るのが我我二人であるとあなたも約束したのだから、私を置いて家へ行つてしまふことは出来ない筈だ。」

と、帝がお云ひになると、そのお心もちのよくわかる女も、非常に悲しさうにお顔を見て、

「限りとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり、

死がそれほど私に迫つて来て居りませんのでしたら。」

これだけのことを息も絶え絶えに云つて、なほ帝にお云ひしたいことがありさうであるが、全く氣力は無くなつてしま

いた。死ぬのであつたら此儘自分の傍で死なせたいと帝は思召したが、今日から始める筈の祈禱も高僧達が承つてゐて、それもせひ今夜から始めねばなりませんと云ふやうなことも申し上げて方方から更衣の退出を促すので、別れ難く思召しながらお歸しになつた。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになつてお眠りになることが困難であつた。歸つた更衣の家へお出しになる尋ねの使は直ぐ歸つて来る筈であるが、それすら返辭を聞くことが待遠しいであらうと仰せられた帝であるのに、御使は、

「夜半過ぎにお卒かく去になりました。」

と云つて、故大納言家の人達の泣き騒いでゐるのを見ると力が落ちて其儘御所へ歸つて來た。

更衣の死をお聞きになつた帝のお悲しみは非常で、其儘引き籠つておいでになつた。その中でも忘れがたみの皇子は傍へ置いておきたく思召したが、母の忌服中の皇子が、穢れのやかましい宮中においてになる例などはないので、更衣の實家へ退出されることになつた。皇子はどんな大事があつたともお知りにならず、侍女達が泣き騒ぎ、帝のお顔にも涙が流れてばかりゐるのだけをお思ひになる風であつた。父子の別れと云ふやうなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心もちほどお氣の毒なものではなかつた。

どんなに惜しい人でも遺骸は遺骸として扱かへねばならぬ、葬儀が行はれることになつて、母の未亡人は遺骸と同時に火葬の煙になりたいと泣き焦れてゐた。そして葬送の女房の車に強ひて望んで一緒に乗つて愛宕の野に嚴めしく設けられた式場へ着いた時の未亡人の心はどんなに悲しかつたであらう。

「死んだ人を見ながら、やはり生きてゐる人のやうに思はれてならない私の迷ひを覺さすために行く必要があります。」と賢さうに云つてゐたが、車から落ちてしまひさうに泣くので、こんなことになるのを恐れてゐたと女房達は思つた。

宮中から御使が葬場へ來た。更衣に三位を贈られたのである。勅使がその宣命せんめいを讀んだ時程未亡人にとつて悲しいことはなかつた。三位は女御に相當する位階である。生きてゐた日に女御とも云はせなかつたことが帝には残り多く思召されて贈位を賜はつたのである。こんなことででも後宮の或る人人は反感を持つた。同情のある人は故人の美しさ、性格のなだらかさなどで憎むことの出来なかつた人であると、今になつて桐壺の更衣の眞價を思ひ出してゐた。餘りにひどい御殊寵ぶりであつたから其の當時は嫉妬を感じたのであると其等の人は以前のことを思つてゐた。優しい同情深い女性であつた

のを、帝付きの女官達は皆戀しがつてゐた。「なくてはぞ人は戀しかりける」とはかうした場合のことであらうと見えた。時は人の悲しみに關りもなく過ぎて七日七日の佛事が次ぎ次ぎに行はれる、その度に帝からはお用ひの品物が下された。愛人の死んだ後の日がたつて行くに随つてどうしやうもない寂しさばかりを帝はお覺えになるのであつて、女御、更衣を宿直に召されることも絶えてしまつた。ただ涙の中の御朝夕であつて、拜見する人までが潤つぽい心になる秋であつた。

「死んでからまでも人の氣を惡くさせる御寵愛ぶりね。」

などと云つて、右大臣の娘の弘徽殿の女御などは今さへも嫉妬を捨てなかつた。帝は一の皇子を御覽になつても更衣の忘れがたみの皇子の戀しさばかりをお覺えになつて、親しい女官や、御自身のお乳母などを其家入おつかはしになつて若宮の様子を報告させておいでになつた。

野分のきふりに風が出て肌寒の覺えられる日の夕方に、平生よりも一層故人がお思はれになつて、鞍負あしひの命婦と云ふ人を使としてお出しになつた。夕月夜の美しい時刻に命婦を出かけさせて、その儘深い物思ひをしておいになつた。以前にかうした月夜は音楽の遊びが行はれて、更衣はその一人に加つて勝れた音楽者の素質を見せた。またそんな夜に詠む歌なども平凡ではなかつた。彼女の幻は帝のお目に立ち添つて少しも消えない。しかしながらどんなに濃い幻でも瞬間の現實の價值はないのである。

命婦は故大納言家に着いて車が門から中へ引き入れられた利那からもう云ひやうのない寂しさが味はれた。未亡人の家であるが、一人娘のために住居の外見などにも見すばらしさが無いやうにと、立派な體裁を保つて暮してゐたのであるが、子を失つた女主人の無明の日は續くやうになつてからは、暫くのうちに庭の雜草が行儀惡く高くなつた。またこのごろの野分の風で一層邸内が荒れた氣するのであつたが、月光だけは伸びた草にもさはらず射し込んだその南向きの座敷に命婦を招じて出て來た女主人は直ぐにも物が云へないほどまた悲しみに胸をいつばいにしてゐた。

「娘を死なせました母親がよくも生きてゐられたものと云ふやうに、運命がただ恨めしうございますのに、かうしたお使が荒ら屋あらいやへおいで下さるとまた一層自分が恥しくてなりません。」

と云つて、實際堪へられないだらうと思はれるほど泣く。

「こちらへ上りますと、また一層お氣の毒になりまして、魂も消えるやうでございますと、先日典侍ないしやくしは陛下へ申上げてい

らつしやいました。が、私のやうな淺薄な人間でもほんたうに悲しさが身に沁みます。」

と云つてから、暫くして命婦は帝の仰せを傳へた。

「當分夢ではないであらうかと云ふやうにばかり思はれましたが、漸く落ちつくと共に、どうしやうもない悲しみを感ぜるやうになりました。こんな時はどうすればよいのか、せめて話し合ふ人があればいいのですがそれありません。目立たぬやうにして時時御所へ來られてはどうですか。若宮を長く見ずにゐて氣がかりでならないし、また若宮も悲しんで居られる人ばかりの中にゐて可哀相ですから、彼を早く宮中へ入れることにして、あなたも一緒においでなさい。」

「かう云ふお言葉ですが、涙にむせ返つておいでになつて、しかも人に弱さを見せまいと御遠慮をなさらないでもない御樣子がお氣の毒で、ただおほよそだけを承つただけで參りました。」

と云つて、また帝のお言傳ての外の御消息を渡した。

「涙で此頃は目も暗くなつて居りますが、過分な忝かたじけなくい仰せを光明にいたしました。」

未亡人はお文を非見するのであつた。

時がたてば少しは寂しさも紛れるであらうかと、そんなことを頼みにして目を送つてゐても、日がたてばたつほど悲しみの深くなるのは困つたことである。どうしてゐるかと思ひやつてゐる小兒も、揃つた兩親に育てられる幸福を失つたものであるから、子を失つたあなたに、せめてその子の代りとして面倒を見てやつてくれることを頼む。

など細細と書いておありになつた。

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩が止を思ひこそやれ

と云ふ御歌もあつたが、未亡人は湧き出す涙が妨げて明らかに拜見することが出来なかつた。

「長生きをするからかうした悲しい目にも逢ふのだと、それが世間の人の前に私をきまり悪くさせることなのでございますから、まして御所へ時時上ることなどは思ひも寄らぬことでございます。勿體ない仰せを伺つてゐるのですが、私が伺候いたしますことは今後も實行は出来ないでございませう。若宮様は、やはり御父子の情と云ふものが本能にありますものと見えて、御所へ早くお入りになりたい御様子をお見せになりますから、私は御道理だとお可哀相に思つて居りますと云ふことなどは、表向きの奏上でなしに何かのお序でに申上げて下さいませ。良人も早く亡くしますし、娘も死なせて

しまひましたやうな不幸づくめの私が御一緒に居りますことは、若宮のために縁起の宜しくないことと恐れ入つて居ります。」

などと云つた。そのうち若宮ももうお寢みになつた。

「またお目覚めになりますのをお待ちして、若宮にお目に懸りまして、委しく御様子も陛下へ御報告したいのでございますが、使の私の歸りますのをお待ちかねでもいらつしやいますでせうから、それでは餘り遅くなるでございませう。」

と云つて命婦は歸りを急いだ。

「子を失くしました母親の心の、悲しい暗さがせめて一部分でも晴れます程の話をさせて頂きたいのですから、公のお使でなく、氣樂なお氣もちでお休みがてらまたお立ち寄り下さい。以前は嬉しいことでよくお使においで下さいましたのですが、こんな悲しい勅使であなたをお迎へするとは何と云ふことでせう。返す返す運命が私に長生きさせるのが苦しいでございます。故人のことを申せば、生れました時から親達に輝やかしい未來の望みを持たせました子で、父の大納言はいよいよ危篤になりますまで、この人を宮中へ差し上げようと自分の思つた事をぜひ實現させてくれ、自分が死んだからといつて今迄の考へを捨てるやうなことをしてはならないと、何度も何度も遺言致しましたが、確かな後援者なしの宮仕へは、却つて娘を不幸にするやうなものではないだらうかとも思ひながら、私に致しましてはただ遺言を守りたいばかりに陛下へ差し上げましたが、過分な御寵愛を受けまして、そのお光りで見すばらしさも隠して頂いて、娘はお仕へしてゐたのでせうが、皆さんの御嫉妬の積つて行くのが重荷になりまして、壽命で死んだとは思へませんやうな死に方を致しましたのですから、陛下の餘りに深い御愛情が却つて恨めしいやうに、盲目的な母の愛から私は思ひも致します。」

こんな話をまだ全部も云はないで未亡人は涙で咽せ返つてしまつたりしてゐるうちにますます深更になつた。

「それは陛下も仰せになります。自分の心でありながら餘りに穩かでない程の愛しやうをしたのも前生の約束で長くは一緒に居られぬ二人であることを意識せずに感じてゐたのだ。自分等は恨めしい因縁で繋がれたのだ、自分は即位してから、誰のためにも苦痛を與へるやうなことはしなかつたといふ自信を持つてゐたが、あの人によつて負つてならぬ女の恨みを負ひ、終ひには何よりも大切なものを失つて、悲しみにくれて以前よりもつと愚劣な者になつてゐるのを思ふと、自分等の前生の約束はどんなものであつたか知りたいとお話になつて濕つぽい御様子ばかりお見せになつてゐます。」

どちらも話すことにきりが無い。命婦は泣く泣く、

「もう非常に遅いやうですから、復命は今晩のうちに致したいと存じますから。」

と云つて、歸る仕度をした。落ち際に近い月夜の空が澄切つた中を涼しい風が吹き、人の悲しみを促すやうな蟲の聲がするのであるから歸りにくい。

鈴蟲の聲の限りを盡くしても長き夜飽かず降る涙かな

車に乗らうとして命婦はこんな歌を口誦んだ。

「いとどしく蟲の音しげき淺茅生に露置き添ふる雲の上人

却つて御訪問が恨めしいと申し上げたい程です。」

と未亡人は女房に云はせた。意匠を凝らせた贈物などする場合でなかつたから、故人の形身といふことにして、唐衣と袈の一揃へに、髪上げの用具の入つた箱を添へて贈つた。

若い女房達の更衣の死を悲しむのは無論であるが、宮中住居を仕馴れてゐて、寂しく物足らず思はれることが多く、お優しい帝の御様子を思つたりして、若宮が早く御所へお歸りになるやうにと促すのであるが、不幸な自分が御一緒に上つてゐることも、また世間に批難の材料を與へるやうなものであらうし、またそれかといつて若宮とお別れしてゐる苦痛にも堪へ切れる自信がないと未亡人は思ふので、結局若宮の宮中入りは實行性に乏しかつた。

御所へ歸つた命婦は、まだ宵のままで御寢室へ入つておいでにならない帝を氣の毒に思つた。中庭の秋の花の盛りなのを愛していらつしやる風を遊ばして凡庸でない女房四五人をお傍に置いて話をしておいでになるのであつた。此頃始終帝の御覽になるものは、玄宗皇帝と楊貴妃の戀を題材にした白樂天の長恨歌を、亭子院が繪に遊ばして、伊勢や貫之に歌をお詠ませになつた巻物で、その外日本文學でも、支那のでも、愛人に別れた人の悲しみが歌はれたものばかりを帝はお讀みになつた。帝は命婦にこまごまと大納言家の様子をお聞きになつた。身に沁む思ひを得て來たことを命婦は外へ聲を憚りながら申し上げた。未亡人の御返書を帝は御覽になる。

勿體なさをどう始末いたして宜しうございますやら。かうした仰せを承りましても愚か者はただ悲しい悲しいとばかり思はれるのでございます。

荒き風防ぎし蔭の枯れしより小萩が上ぞしづ心無き

と云ふやうな、歌の價値の疑はしいやうな物も書かれてあるが、悲しみのために落ちつかない心で詠んでゐるのであるからと寛大に御覽になつた。帝はある程度までは抑へてゐねばならぬ悲しみであると思召すが、それが御困難であるらしい。始めて桐壺の更衣の上つて來た頃のことなどまでがお心の表面に浮び上つて來ては一層暗い悲しみに帝をお誘ひした。その當時暫く別れてゐると云ふ事さへも自分には辛かつたのに、かうして一人でも生きてゐられるものであると思ふと自分は偽り者のやうな氣がするとも帝はお思ひになつた。

「死んだ大納言の遺言を苦勞して實行した未亡人への酬いは、更衣を後宮の一段高い位置に据ゑることだ、さうしたいと自分はいつも思つてゐたが、何もかも皆夢になつた。」

とお云ひになつて、未亡人に限りない同情をしておいでになつた。

「然し、あの人はゐなくても若宮が天子にでもなる日が來れば、故人に^{さまだ}後の位を贈ることも出来る。それまで生きてゐたいとあの夫人は思つてゐるだらう。」

などといふ仰せがあつた。命婦は贈られた物を御前へ並べた。これが唐の幻術師が他界の楊貴妃に逢つて得て來た玉の簪であつたらと、帝はかひないこともお思ひになつた。

尋ね行くまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

繪で見る楊貴妃はどんなに名手の描いたものでも、繪に於ける表現は限りがあつて、それ程の勝れた顔も持つてゐない。太液の池の蓮花にも、未央宮の柳の趣きにもその人は似てゐたであらうが、又唐の服裝は華美ではあつたであらうが、更衣の持つた柔かい美、艶な姿態をそれに思ひ比べて御覽になると、これは花の色にも鳥の聲にも譬へられぬ最上のものであつた。お二人の間はいつも、天に在つては比翼の鳥、地に生れれば連理の枝と云ふ言葉で永久の愛を誓つておいでになつたが、運命はその一人に早く死を與へてしまつた。秋風の音にも蟲の聲にも帝が悲しみを覺えておいでになる時、弘徽殿の女御はもう久しく夜の御殿の宿直にもお上りせずにて、今夜の月明に更けるまでその御殿で音楽の合奏をさせてゐるのを帝は不愉快に思召した。このころの帝のお心持をよく知つてゐる殿上役人や帝附きの女房なども皆弘徽殿の樂習に反感を持つた。負け嫌ひな性質の人で更衣の死などは眼中にないといふ風をわざと見せてゐるのであつた。

月も落ちてしまつた。

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらん淺茅生の宿

命婦が御報告した故人の家のことをなほ帝は想像遊ばしながら起きておいでになつた。

右近衛府の土官が宿直者の名を披露するのを以てすれば午前二時になつたのであらう。人目をお憚りになつて御寢室へお入りになつてからも安眠を得給ふことは出来なかつた。

朝のお目覚めにもまた、夜明けも知らずに語り合つた昔の御追憶がお心を占めて、寵姫の在つた日も亡い後も朝の政務はお怠りになることになる。お食欲も無い。簡単な御朝食はしるしだけお取りになるが、帝王の御朝餐として用意される大床子のお料理などは召上らないものになつてゐた。それには殿上役人のお給仕がつくのであるが、それらの人は皆この状態を歎いてゐた。總て側近する人は男女の別なしに困つたことであると歎いた。よくよく瀧い前生の御縁で、その當時は世の批難も後宮の恨みの聲もお耳には留まらず、その人に關することだけは正しい判斷を失つておしまひになり、また死んだ後ではかうして悲しみに沈んでおいでになつて政務も何もお顧みにならない、國家のために宜しくないことであると云つて、支那の歷朝の例までも引き出して云ふ人もあつた。

幾月かの後に第二の皇子が宮中へお入りになつた。ごく小さい時ですらこの世のものとはお見えにならぬ御美貌の備はつた方であつたが、今はまた一層輝やく程のものに見えた。その翌年立太子のことがあつた。帝の思召は第二の皇子にあつたが、誰といふ後見の人がなく、また誰も肯定しないことであるのを悟つておいでになつて、却つてその地位は若宮の前途を危険にするものであると思ひになつて、御心中を誰にもお洩らしにならなかつた。東宮にお成りになつたのは第一親王である。この結果を見て、あれほどの御愛子でもやはり太子にはお出来にならないのだと世間も云ひ、弘徽殿の女御も安心した。その時から宮の外祖母の未亡人は落膽して更衣のある世界へ行くことの外には希望もないと云つて一心に御佛の來迎を求めて、たうとう亡くなつた。帝はまた若宮が祖母を失はれたとてお悲しみになつた。これは皇子が六歳の時のことであるから、今度は母の更衣の死に逢つた時とは違ひ、皇子は祖母の死を知つてお悲しみになつた。今迄始終お世話を申してゐた宮とお別れするのが悲しいと云ふことばかりを未亡人は云つて死んだ。

それから若宮はもう宮中にばかりおいでになることになつた。七歳の時に書初めの式が行はれて學問をお始めになつた

が、皇子の類のない聰明さに帝はお驚きになることが多かつた。

「もうこの子を誰も憎むことが出来ないでせう。母親の無いといふ點だけでも可愛がつておやりなさい。」

と帝はお云ひになつて、弘徽殿へ晝間おいでになる時も一緒におつれになつたりしてそのまま御簾の中にまでもお入れになつた。どんな強さ一方の武士だつても仇敵だつてもこの人を見ては笑みが自然に湧くであらうと思はれる美しい少童でおありになつたから、女御も愛を覺えずにはゐられなかつた。この女御は東宮の外に姫宮をお二人お生みしてゐたが、その方方よりも第二の皇子の方がお綺麗であつた。姫宮方もお隠れにならないで賢い遊び相手としてお扱ひになつた。學問はもとより音楽の才も豊かであつた。云へば不自然に聞える程の天才兒であつた。

其の時分に高麗人が來朝した中に、上手な人相見の者が混つてゐた。帝はそれをお聞きになつたが、宮中へお呼びになることは亭子院のお誠めがあつてお出来にならず、誰にも祕密にして皇子のお世話役のやうになつてゐる右大辨の子のやうに思はせて、皇子を外人の旅宿する鴻臚館へおやりになつた。

相人は不審さうに頭をたびたび傾けた。

「國の親になつて最上の位を得る人相であつて、さてそれでよいかと拜見すると、さうなることはこの人の幸福な道でない。國家の柱石になつて帝王の輔佐をする人として見てもまた違ふやうです。」

と云つた。辨も漢學のよく出来る官人であつたから、筆紙を以てする高麗人との問答には頓白い物があつた。詩の贈答もして高麗人はもう日本の旅が終らうとする期に臨んで珍らしい高貴の相を持つ人に逢つたことは、今更にこの國を離れ難くすることであると云ふやうな意味の作をした。若宮も送別の意味をお作りになつたが、その詩を非常に賞めて種種な其の國の贈物をしたりした。

朝廷からも高麗の相人へ多くの下賜品があつた。その評判から東宮の外戚の右大臣などは第二の皇子と高麗の相人との關係に疑ひを持つた。好遇された點が腑に落ちないのである。聰明な帝は高麗人の言葉以前に皇子の將來を見通して、幸福な道を選ばうとしておいでになつた。それで殆ど同じ事を占つた相人に價值をお認めになつたのである。四品以下の無品親王などで、心細い皇族としてこの子を置きたくない、自分の代もいつ終るか知れぬのであるから、將來に最も頼もしい位置をこの子に設けて置いてやらねばならぬ、臣下の列に入れて國家の柱石たらしめることが一番よいと、かうお決め